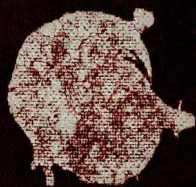


宮沢賢治

吉本隆明



近代日本詩人選 13

宮沢賢治

吉本隆明



筑摩書房

吉本隆明（よしもとたかあき）

一九二四年東京に生れる。一九四七年

東京工業大学理学系化学科卒。評論家。

著書に、『最後の親鸞』（春秋社）、『悲

劇の解説』（筑摩書房）、『ハイ・イメ

ージ論Ⅰ』（福武書店）『吉本隆明全集

撰』（全十巻、大和書房）などがある。

宮沢賢治 近代日本詩人選 13

一九八九年七月三十日 初版第一刷発行
一九八九年十月五日 初版第三刷発行

著 者 吉本隆明

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社筑摩書房

〒一一一 東京都台東区蔵前二丁目六番四号

T e l 〇三・五六八七・二六八〇（営業）

〇三・五六八七・二六七〇（編集）

F a x 〇三・五六八七・二六八五（営業）

〇三・五六八七・二六七八（編集）

印刷 明和印刷 製本 和田製本

© Takaki Yoshimoto 1989

ISBN4-480-13913-3

目 次

第Ⅰ章 手紙で書かれた自伝

第Ⅱ章 父のいない物語・妻のいる物語

第Ⅲ章 さまざまな視線

第Ⅳ章 「銀河鉄道の夜」の方へ

第Ⅴ章 喩法・段階・原型

第Ⅵ章 擬音論・造語論

付 擬音表・造語表

年 譜

テキストおよび参考文献

あとがき

函装画Ⅱ 加納光於《作品》（1979 部分）

宮沢賢治

第Ⅰ章 手紙で書かれた自伝

1

手紙の中味はいつも伝えたいあいての方をむいている。そしてこのあいてはいくつかにわけられてしまう。まず知友や近親、それだけわけてしまえば、あとは半ば公けの局面をもつものしかのこらない。しいていえばもうひとつ事務事項や儀礼の交換だけのものだ。宮沢賢治の生涯は、ひとなみにじぶんを公けに意味をもった存在に仕上げたいという思春期のはげしい願望からはじまって、いくつかの挫折を経たあと、じぶんが公けに意味をもつひととして振舞うのを透明に否定するような場所へ超人的な意志でたどっていった過程であった。そのためこのされた手紙は、思春期からあと賢治が演じた途方もないドラマの脚本を見まもってくれたり、舞台で共演してくれたたりしたひとたちか、それとまったく逆に、賢治が演じたくたえようがなかったドラマに、こころならずも冷水を浴びせることになったひとたちにあてたものだ。

突然出京致しました

進退谷まったのです

二三日は夜丈け表記に帰ります　その後の事は又追って御報知致しませう

(大正十(一九二二)年一月二十四日　保阪嘉内あて)

拝啓　昨日帝大前のある小さな印刷所に校正係としてはいりました。仕事は大学の講義のノートを謄写版で刷って出すことであります。どうか御安心くださるようお願いします。末筆ながら御健勝を祈り上げます。

(大正十(一九二二)年一月二十八日　保阪嘉内あて、原文は候文)

なすところもなく家業の質屋の店番をやつて、じつと座っているような生活が、せつぱつまつてこらえきれなくなつた。そして信仰ひとすじの生活にはいるほか道がないとおもいきめ、家をとびだして上京した。ひとまず父親の知りあいの家へ厄介になつて、東大前の印刷所に内職をみつけた。どこにも解りにくいところはない。宗教やイデオロギーでも、文学・芸術でもおなじだ。日常とかけはなれたものをいちずに追いかけて、観念を中心に生活を組みたてようとおもいつめた思春期の振舞い方は、誰でも、それほどかわりはないとおもえる。

まえから、父親を経営主にして鉱物の化学処理の工場をつくり、じぶんはそのしたで技術のじつさいにたずさわつて、両親が家業の質屋をやらなくても生活がたつようにという構想をたてていた。でもそれはすでに挫折していた。また信仰のことでは、父親がふかく帰依していた

浄土真宗にみたされないので、すでに田中智学の国柱会にはいつて、ゆるぎない法華経信者になつていた。また本音をいえば、法華経を護持する宗教的な生活のほかには、ここからやりたいいことなど何もないほど、いつのまにかおもいつめていた。

ただ宮沢賢治のいちずな入信、出奔、そのあとの進退には、どこか歯ぎれの悪さがつきまがつている。とくに父親との対立の仕方がそうだ。ひとくちにいえば、しつこくむしろあまりに子どもっぽく、家の宗教を浄土真宗から日蓮宗へかえさせようと、繰りかえし父親に迫っている。そうかとおもうと、父親がいうことをきかなければ、じぶんでおもしろいきめた生涯のコースをつつ走るだけだ、といった決断のすがたが、どうしても宮沢賢治からはえられない。手紙でうかがうかぎり、家出のあとひとつひとつの行動はみんな父親に報告し、了承をえ、反対されれば必要以上におもい悩んで、父親の意向にしたがおうとしている。この歯ぎれのわるさと父親への行儀のよさは、思想や宗教がからんだふつうの思春期の息子と父親の対立像とはまるでちがつている。かれの初期の伝記に特異さがあるとすれば、そこだけだといつていくらいだ。突然の家出とそのあと二、三日の行動について、宮沢賢治は理解者だった親戚すじの関徳弥に便りをやっている。

本日迄の動静大体御報知致します。

何としても最早出るより仕方ない。あしたにしようか明後日にしようかと二十三日の暮方店の火鉢で一人考へて居りました。その時頭の上の棚から御書が二冊共ばったり背中に落

ちました。さあもう今だ。今夜だ。時計を見たら四時半です。汽車は五時十二分です。すぐに台所へ行って手を洗ひ御本尊を箱に納め奉り御書と一所に包み洋傘を一本持つて急いで店から出ました。

(大正十(一九二一)年一月三十日 関徳弥あて)

第二日には仕事はとにかく明治神宮に参拝しました。その夕方今の処に間借りしました。はじめの晩は実に仕方なく小林様に御厄介になりました。家を出ながらさうあるべきではないのですが本当に父母の心配や無理な野宿も仕兼ねたのです。その内ある予約の本をやめて二十九円十銭受け取りました。窮すれば色々です。

三日目朝大学前で小さな出版所に入りました。謄写版で大学のノートを出すのです。朝八時から五時半迄座りっ切りの労働です。周囲は着物までのんでしまつてどてら一つで主人の食客になつてゐる人やら沢山の苦学生、弁(ペンゴシ)の事なさうです)にならうとする男やら大抵は立派な過激派ばかり。主人一人が利害打算の帝国主義者です。後者の如きは主義の点では過激派よりもっと悪い。田中大先生の国家がもし一点でもこんなものならもう七里けつぱい御免を蒙つてしまふ所です。

さあこゝで種を蒔きますぞ。もう今の仕事(出版、校正、著述)からはどんな目にあつてもはなれませんか。こゝまで見届けて置けば今後は安心して私も空論を述べるとは思はないし、生活ならば月十二円なら何年でもやって見せる。

一向順序ありません。ごめん下さい。

（大正十（一九二一）年一月三十日 関徳弥あて）

日蓮宗派の聖典が二冊棚からおちてきて背中にあたったのは、まったく偶然だが、家を出たのは必然だったことがわかる。そしてこんなとき偶然はこころの反応のために、禍福を占う信号の役をするだけだ。本がおちてきても、杖にぶつかってもいいはずだった。

住居は賢治にとつて生涯父親や家庭の掌のなかをでられなかった。その宿命みたいなものは、こころの動きもふくめて、このいちばんはじめ親元をはなれたときの手紙に、もうかたちをあわしている。おなじことをいえば、出版、校正、著述からはどんなことがあってもはなれないという表明は、さまざまな運命にさらされることになった。運命がスムーズに賢治を文筆家として自活させてくれたら、もしかすると凡庸な童話作家ができあがったかもしれない。文面からはそんな臆測を試みたくなるような未熟さが顔をだしている。だがこの臆測は万が一にも成り立ちそうもなかった。ただひとつ法華經の行者としての賢治だけは、ゆるぎがなく決定的に運命の水脈をすでにつくりだしていたからだ。そこを外れることはありえないことだった。ほぼひと月あとに父親政次郎にあてた手紙は、公開されている。それをみると知友にあてたものとまるで調子がちがってくる。

二十二日附のお手紙ありがたく拝誦いたしました。私は変りなく衛生にも折角注意して夜はいつも十時前に寝みますしお湯にも度々参りますしその他すべて仰せの様に居りま

すからどうか御安心願ひます。殊に仕事の方は午前中四時間ですから一向一寸の間で疲れも何も致しません。ことさんには一日隔き位にお見舞しては居りますがそんな訳でありますから決して御心配ございません。

さて、寒い処、忙がしい処父上母上はじめ皆々様に色々御迷惑をお掛け申して誠に申し訳ございません。一応帰宅の仰度々の事実に心肝に銘ずる次第ではございますが御帰正の日こそは総ての私の小さな希望や仕事は投棄して何なりとも御命の儘にお仕へ致します。それ迄は帰郷致さないこと最初からの誓ひでございますからどうかこの段御諒察被下早く早く法華経日蓮聖人に御帰依遊ばされ一家同心にして如何にも仰せの様に世諦に於てなりとも為法に働く様相成るべく至心に祈り上げます。就ては御相談の趣紙面を以て書し上げ奉り皆様御集りの際万一微生の考等をも御参考なさる際にはご覧を願ひます。

総じて申せば唯々皆様早く正道にお入りなされ仏果決定の事が先づ第一と存じます。その他の事はその上ではじめて絶対に重大な問題となることでございます。

一、父上電気会社常務御就職の趣は余りお忙しくさへ無ければ実には私はお欣喜申し上げる次第でございます。

一、とし子の事は充分の御再考を願ひ度く存じます。それも先方による次第ではございますが何分子供を持つての上は随分健康に無理ばかりできると存じますが今少しゆっくりの方が如何でございませうか。

一、太郎さんの職業は茲一ヶ年兵役前は諸方参考の上お定めなく、太郎さんに依つて撰定

される様致されては如何でございますか。私の考丈けでは当地の方が大変やり易く思ひます。殊に出京後左様に思ひます。学校の御希望は如何でせうか。

一、質屋は出来る丈小規模にして鉄三と徳哉氏とに責任を以て経営する様にさせ純益の半分を分つ様なされては如何でございますか。決して間違ひはありません。総て危なげに見えても大丈夫やるものでございます。尤も月収百円や二百円は当地ではこの不景氣の際でも一寸した労働者はみなとりますが質屋の方は從來の關係もあつて急に止められなかつたならの事でございます。

一般に云へば只今は資本を以て経営するのはあまり利益ではありません。私の所では主人夫婦がやきもき十二時間も働いて月純益三百円位、九時間筆耕するものは月百二十円にはなりみんなの俸給は五百円を越えませう。

一、私は理財の能力が甚欠けて居りますから決して資本の運転はできません。お赦し願ひます。たゞの労働者としてなら何でも致します。

(大正十(一九二一)年二月二十四日 宮沢政次郎あて)

家出したのになぜこんなこまごまと復命しなくてはならないのか、理解に苦しむといつていい。午後からの時間は何をしているのかが父親にはないしよだが、そのあと信仰のことに言及しているから推察はできる。父親はこのひと月ばかりのあいだに、何はともあれ一応帰郷せよと、たびたびいつてやったことがわかる。それにたいして、家の宗教を日蓮による法華経信仰

に改めなにかぎりは帰郷するつもりはない、日蓮宗に帰依してくれたなら、じぶんの希望ややりたい仕事はなげすめても、父親の命ずるままに仕えるといっている。そのあとで、一転して家業について、また自身の身の処し方について、父親がかけた相談に、ていねいに答えている。父と子の対立が深刻になる気配ははぐらかされている。ひと月のあいだに信仰のことをのぞけば、申し分なくわかりのいい親と子にもどっているのがわかる。どうしてこんな具合に、信仰の対立はしつこく固執され、それとちぐはぐに親と子の情感は融けておちついていったのか。この謎は宮沢賢治が帰依した日蓮の理念からみるのが、いちばん適切な気がする。日蓮の宗義にしたがうと、父母を尊崇し、父母のためにじぶんをかえりみず仕えることは、信仰の第一義だった。しかも父母を「永エニ成仏セズ」の道に入れたままにしてしまうのは、父母の恩をしらないことになる。日蓮は「開目抄」でのべている。

外典三千余巻は詮じつめてみると二つに帰する。いわゆる孝と忠とである。忠もまた孝の家からでるものだ。孝というのは「高」だ。天が高いといっても孝よりは高くない。又孝は「厚」だ。地が厚いといっても孝よりは厚くない。聖人賢者のふたつは孝の家からでたものだ。まして、仏法を修学しようとする者が、知恩や報恩を實踐することがなくていいはずがない。仏弟子はかならず四恩（父母、衆生、国王、三宝の恩）を知って、知恩、報恩をむくいるべきだ。其のうえ、舍利弗、迦葉等の二乗は、二百五十戒、三千の威儀をととのえ保持して、味、浄、無漏の三つの静慮と阿含經をきわめ、三界にわたる見識、思慮

をつくした。知恩、報恩の人の手本というべきだろう。それなのに世尊はかれらを不知恩の人だと定められた。その理由は、父母の家を出て出家の身となるのは、必ず父母を救おうがためだ。舍利弗、迦葉など二乗の者は自身は解脱をえようとがんばっても、利他の行が欠けている。たとえ、そのときどき応分の利他の行いはあっても、父母などを「永不成仏（永エニ成仏セズ）」の道に入れてしまうのは、いつてみれば不知恩の者になったということだ。

〔開目抄〕私訳

宮沢賢治の詩と童話をうごかした原動機は、想像力をつかつてさめた現実と、眠りのなかの夢と、死のあとの他界とを、スムーズに手にとるようにつなげ、作品の空間や時間を大乘の宇宙大に拡げることにあつた。その入口にあつて自伝と生活に方向をあたえ、よろよろと動かし、軌道をした原動機は、日蓮の「開目抄」のこの一節だったといつても、けつして誇張にはならないとおもう。

父親政次郎は宗祖日蓮がいちばん否定的に批判した浄土宗派の在地の有力な信仰者だった。「開目抄」をかがみにすれば「永エニ成仏セズ」の道にあつたことになる。一応帰郷せよという父親の厳命に、第三者がみれば幼なすぎるほど父親や家族の日蓮宗への改宗にこだわり、叶わなければ帰郷しないと言いはっているのは、たぶんそのためだった。

改宗のすすめ以外のことになると、とたんに父親への尊崇があらわになるのも、おなじ理由であつた。父親が会社役員に就任するのをどうおもうか、妹の結婚話はどうか、親戚の若者の

職業と兵役のあいだはどう調整するか、家業の質屋はどう運営するかといった相談には、ふつうの父親と長男のあいだ以上の親密さで、第三者からはうかがいしれない直接感情が交換されている。

もともと父と子の確執や対立の問題とはなりえないはずの宗教のちがいが、父と子のあいだの生涯の生活を左右する大問題になる。経済上まったく独立して生計をたてればすむはずの子の立場が、家業とからめて、奇怪ともいえるほど生涯のコースを混濁させている。これが宮沢賢治の自伝のかなめだった。そしてそれを統御したのは「開目抄」の理念だとみられる。

2

父と子をめぐって宮沢賢治の思春期を吹きまくった強風のきざしは、のこった手紙からは旧制盛岡中学校三年級（明治四十五年・大正元年、一九一二年、十六歳）ごろからはじまる。誰でもおなじように、このころとおい乳胎児のときの母とのかかわりが、父と子のあいだであらわになる。

盛岡中学四学年の秋の父親政次郎あての手紙をよむと、思春期の初葉にあらわになるリビド―が、噴きだす出口をもとめて、さまざまな意欲の形をとりながら、どれもぬけ道がなく、袋のなかでもがいているさまがうかがえる。そのうえ、はやくから浄土真宗の篤信家である父親の信仰の色合いが家のなかにみなぎっていたので、その影響はつづいていた。中学生らしく静

座法に凝つて四十分で全身の筋肉が自動的に活動するようになったと父親に報告してみたり、筋骨たくましく身体を鍛えようとかんがえたり、郷土の歌人啄木の『一握の砂』を模倣して短歌を作りはじめたりした。そうかとおもうと父親に「危険思想」やデカダンスに走ると思われはしまいか、ここを配っている。心配は無用でじぶんはすでに「道を得」ている、『歎異抄』の第一条をひたすら信じて、念仏を唱えているといつてみたり、もつと極端に仏のまえて命をぎせいにすることがまえをもっていると、大人びたことをのべている。また、仏が護つてくれるから報恩寺の羅漢堂を巡るのも怖くないし、岩手山の頂上に夜一人で登ることだつて恐くないなどと、稚拙なことも書いている。

ようするにここではごくふつうの思春期の発生をみるのがいい気がする。そしてもつと言いたいのなら、この超人的な生涯をめざした詩人にも、ふつうの思春期があつたことにかえつておどろいたほうがいくらいだ。

運命論的な言いかたをすれば、書き言葉の発現のほうが身体の発現よりも、すこしさきを越していた。生理からわきだした言葉が走つてゆくのを、書くことでひきとめたということかもしれない。

のろぎ山のろぎをとればいたゞきに黒雲を追ふその風ぬるし
のろぎ山のろぎをとりに行かずやとまたもその子にさそはれにけり

（「明治四十二年四月より」から）